

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730610

研究課題名（和文） 幼児の遊び場面における自発的な歌唱行為の社会的機能に関する研究

研究課題名（英文） The Functions of Songs in the Play of Young Children

研究代表者

石川 眞佐江 （ISHIKAWA MASAE）

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：80436691

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、幼児の遊び場面において歌唱行為の果たす機能について明らかにすることである。方法としては、保育場面での幼児のごっこ遊びにおいて歌が歌われた場면을事例として抽出し、特にごっこ遊びにの場面に焦点を当て、歌によりどのように遊びが変容したかという視点で事例を分析した。分析の結果、ごっこ遊びにおける歌の機能を五点指摘した。①遊びにおける子ども同士の間関係や力関係を変化させる。②一度却下された遊びのアイデアが承認される助けとなる。③遊びに具体的なイメージを付与し、ごっこ遊びの役割や状況設定を変化させる。④何らかの制約により遊びが停滞しそうな状況を打破する。⑤新たな子どもが遊びに参入する際、受け入れられるきっかけを作る。

研究成果の概要（英文）：This research aims to examine the function of songs in social pretend play of young children. Methods include examining the scenes of singing songs in social pretend play of young children at preschools and discussing how the play is changed in such situation. The analysis brought out five functions of songs in social pretend play as listed below. Firstly, it shifts the relationships and the balance of power among young children in play. Secondly, it helps the once rejected ideas of play to be accepted. Thirdly, it gives the concrete images to the play and changes its roles and settings. Fourthly, it breaks the situation when the play is stuck by some restrictions. And finally, it creates the opportunity for new children to be accepted when joining the play.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	266,780	80,034	346,814
2011年度	1,233,220	369,966	1,603,186
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、幼児教育・保育

キーワード：幼児の音楽行動、歌唱行為、遊び、機能

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はピアノ演奏家および音楽教育研究者として、大学院時代から一貫して幼児期の子どもに焦点を当て、子どもの生活の中での音楽的発達や遊びにおける音楽的行動、保育における音楽活動の在り方や意義について研究を進めてきた。

保育現場においては、一斉的な活動で歌を歌う時、その活動をどのようにカリキュラムに位置付けるかということや、その教育的意義が意識されにくく、音程やリズム、発音を正しく歌うということのみにとられる保育者がいる一方、「元気に大きな声で」歌っていれば、「どなり声」や「がなり声」でも容認しているといった状況も見られる。しかし、本当にこれで良いのか、という漠然とした疑問を持ちながら、歌う活動を行なっている保育者は少なくない。

また、乳幼児期における話すことと歌うことの関係性については、さまざまな議論が交わされている。言語発達の過程と歌唱行動に至る過程については、南（1997, 1998）および田中（1998）、志村（1996）など、一定の研究の成果が蓄積されているが、未だにその全容は解明されているとは言えない。

しかし、保育における幼児の生活を観察していると、言葉であらわすことと歌うことは相互に往復する、簡単には分かち難い一連なりの営みであると感じられる。幼児が遊び場面で見せる自発的な歌唱行為が、ただ「楽曲を歌う」ための歌ではなく、遊びの流れに影響を与えたり、他者との相互作用の中で変容したり、コミュニケーションのツールとなったりする様相に興味を抱き、幼児にとっての歌唱行為が、子ども文化の中ではただ「歌を歌う」ということ以上の意味と機能を持っているのではないかとの考えに至った。

保育の場において、「楽曲としての歌を歌うこと」に関しては、これまで大きく分けて以下の三つの視点からの研究が行われてきた。第一に、「皆で一斉に歌う」点に着目した、社会性の発達との関連など、個と全体集団との関係という視点からの研究である。第二に、ピッチマッチングや声域の検証といった、歌唱における子どもの個体能力に関する研究である。第三に、歌唱活動を行う保育者の側の教材の選択基準、音楽観などに関する研究である。

しかし、歌は一斉歌唱などで歌われた場面にとどまらず、遊びの中でさまざまな形であられる。遊び場面における幼児の自発的な歌唱に関しては鈴江ら（1985）および鈴江（1986）や古賀ら（1998）、熊倉（2000）な

どの研究があるが、遊びと音楽との関連について、幼児の自発的な歌唱が遊びに及ぼした

影響という観点から論じた研究は管見の限り見当たらない。

2. 研究の目的

本研究は、幼児期の子ども（3-6歳）を対象とし、遊び場面における自発的な歌唱行為を分析・検討することを通して、幼児期における音楽的コミュニケーションの様相を明らかにし、その社会的な意味と機能を明らかにすることを目的とする。

中でも、既存の文化としての楽曲（子どもの歌）を幼児が遊び場面でどのように自己表現のツール、コミュニケーションの媒体として使用しているのかという点を検討し、歌うことと話すことの境界線の未分化な幼児にとっての歌唱行為の意味及び保育における教育的意義を再検討したい。具体的には以下の三点を目的とする。

- (1) 幼児の遊び場面における自発的な歌唱行為の様相を検討する。
- (2) 上記(1)を踏まえ、幼児期に特有の、音楽的コミュニケーションとしての歌唱行為の社会的機能を明らかにする。
- (3) 上記(1)(2)を踏まえ、保育における歌唱活動の教育的意義を再検討する。

3. 研究の方法

(1) 幼児期の音楽的行動および、幼児期の遊びに関する先行研究の検討と基礎的研究および仮説の構築

これまで研究代表者が行ってきた幼児の音楽的行動に関する研究では、歌唱行為が遊びの展開に変化を与える契機となることが示唆されている（石川 2004）。これらの更なる考察の深化と整理を行うと同時に、幼児期の音楽的行動、特に歌唱行為に関する国内外の先行研究、事例、理論、モデルなどの文献や報告を収集、レビューして批判的吟味を行い、本研究の理論枠組みの構築とそれに基づく仮説の構築に役立てる。

(2) 幼児の遊び場面における自発的な歌唱行為のデータ収集

先行研究の検討および基礎的研究により得られた示唆や仮説をもとに、幼児の遊び場面における自発的な歌唱場面の観察を行い、データの収集を行う。研究代表者がネットワークを持っている、東京都内の幼稚園・保育所及び研究代表者の現勤務先の静岡市周辺の保育施設をデータ収集の対象施設とし、幼児の遊び場面における自発的な歌唱行為の事例データを収集する。観察に際しては、許可を得た上でデジタルビデオカメラ及びフィールドメモによる記録を行い、自発的な歌唱

行為の行われた部分を抽出してエピソード化し、事例データを蓄積する。

(3) 観察調査により得られたデータの抽出・分類・分析・仮説の検証

観察調査により得られた映像記録、フィールド記録等を抽出・分類・分析する。映像記録の分析に当たっては、幼児の遊び場面で自発的な歌唱行為が起きた場面を抽出してエピソード化し、蓄積する。収集されたデータを、理論的枠組み及び仮説にもとづき分析していく。分析の過程で、得られたカテゴリーを用いて分類し、それを踏まえ、幼児の遊び場面における自発的な歌唱行為の社会的機能を明らかにする。

(4) 結果のまとめ

事例分析の結果をもとに、幼児の遊び場面における歌唱行為の社会的機能をまとめ、幼児期における音楽的コミュニケーションと保育における歌唱活動の教育的意義とを結びつけて研究の成果をまとめる。

(5) 関連学会等への参加・成果発表

芸術教育分野の諸学会および保育、教育学分野の所学会に参加し、関連分野の研究者との意見・情報交換、成果の発表を行う。これらの発表は中間段階でも行い、関連分野専門家の意見などを取り入れながら分析に役立つ。

4. 研究成果

本研究では、得られた幼児の遊び場面における自発的な歌唱行為のうち、特に事例数の多く、特徴的な機能の見られた「ごっこ遊び」の場面に焦点を絞り、事例のカテゴリー化および分析を行った。その結果、本研究の成果として、遊び場面における自発的な歌唱行為の特徴としては、以下の三点が明らかとなった。

- (1) ある歌を子どもが共通に知っていることで、その歌の歌詞内容やそこに含まれる状況設定が子ども達全員に共有される。その歌は子ども達の中に蓄積され、場面に応じてさまざまな遊びの中で引用される。
- (2) 引用された歌は一節のみを歌うことでも容易にその全貌が全員に共有され、理解される。
- (3) 引用された歌の内容や状況設定は、そのまま遊びに取り入れられることもあれば、遊びの展開が変わる契機となるだけのこともある。

また、収集した事例の検討を通して、歌の引用がごっこ遊び場面にもたらす影響につ

いて以下の点が明らかとなった。

- (1) 遊びにおける子ども同士の人間関係や力関係を変化させる。
- (2) 却下された遊びのアイデアが歌によって受け入れられる。
- (3) 遊びにより具体的なイメージを付与し、ごっこ遊びの役柄や状況設定を変化させる。
- (4) 何らかの制約により遊びが停滞しそうな状況を打破する。
- (5) 新たな子どもが遊びに参入する際、受け入れられるきっかけを作る。

歌そのものは、大人が子どもに伝えていく文化のひとつの形である。そこには子どもの想像力を刺激するさまざまな世界が作り上げられている。子ども達は歌を歌うことによってその歌の世界をも自分自身の中に蓄積していき、遊びの中でその場面、その時点での自分の気持ちや状況に相応しいと思われる歌を、彼らなりの文脈で自由に駆使している。幼児期の子どもにとって、歌のもつ意味を考えると、歌が幼児に伝えられたその場や、全員で一斉に楽曲を歌う場面だけでなく、受容された歌がどのように浸透し、生活の場面でどのような作用をもち、機能しているかを見ていく必要があると言えよう。

本研究では、特にごっこ遊びにおける歌の機能の一側面について明らかにした。しかし、幼児が遊びや生活の場面で駆使する歌の引用行動には、他にもさまざまな面がある。幼児の生活にはたらく歌の多面的な機能については、今後さらに研究を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ① 石川眞佐江「幼児の並行遊び場面における歌の機能—子ども同士のかわりの生成に着目して—」日本音楽教育学会第43回大会口頭発表 2012年10月 東京音楽大学(東京)
- ② 石川眞佐江「幼児のごっこ遊び場面における歌の機能—見立てと変換の共有に着目して—」日本音楽教育学会第42回大会口頭発表 2011年10月 奈良教育大学(奈良)
- ③ 石川眞佐江「保育における一斉歌唱活動を再考する(2)—うたう活動をとらえる保育者の視点—」日本保育学会第63回大会口頭発表

2010 年 5 月 松山東雲女子大学
(愛媛)

〔図書〕(計1件)

石川眞佐江「就学前教育と子どもの歌—歌う
子どもたちの姿を通して考える—」佐野
靖・杉本和寛編著『文化としての日本のう
た』東洋館出版社 2013 年刊行予定 予
定頁数 11 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 眞佐江 (ISHIKAWA MASAE)

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：80436691

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし